

編集後記

タイム・ラグ――。アップ・テンポの展開を見せる時代にあつては、これは雑誌メディアに負わされる一種の宿命なのだろう。本号の原稿が出揃い、特集に関するさまざまな提言に目を通しながら、まず私が感じたのはそのことだった。思い起こせば、本号の特集を企画したのは、構内の樹々の緑が鮮やかな5月中旬のことで、ちょうど本学の将来設計に関する全学的説明会が開催されて間もない頃のことだった。執筆者の方々には、9月初旬に原稿締め切りということで寄稿をお願いしたのだが、その段階で編集委員の念頭にあつたのは、各方面から寄せられる多様な提言が、法人化を見すえた改革問題を考える際の貴重な参考資料になるのではないか、という期待だった。

ところがこの問題に関する全学的委員会（将来設計検討委員会）の議論は予想外に迅速な展開を見せ、9月初旬に（決定案ではないものの）専門委員会での検討結果が親委員会に提示された。差し迫る法人化、という状況に背中を押されて、スケジュール通りに作業が進行したということだろう。

執筆者たちの声は、はたして最終決定以前に検討委員会のもとに届くのだろうか。遅きに失したということにならないだろうか。いずれにせよ、本号に寄せられた提言は、（めざす方向こそ異なるものの）みな学群教育への熱い思いであふれている。大事なものは、その情熱だろう。教育組織をどう変えようとも、それが教員一人ひとりの教育に対する情熱によって支えられなければ、「仏作って魂入れず」ということにもなりかねない。組織の構成メンバー、つまり教員各人のそういう熱意を汲みつくせるような方向の改革になるのかどうか、がむしろ肝要な点である。そういう観点から、今後の成り行きを見まもりたい。

（笹澤 豊）